

三位一体主日 メッセージ 「三つにして一つ？」 司祭 バルナバ 牛島 幹夫

福音書：マタイによる福音書 28:16-20

6月7日は三位一体主日です。教会暦は、降誕日、復活日、聖霊降臨日など、聖書に書かれている出来事を覚えて、キリストの生涯と、キリストを通して示された神の恵みを分かち合うことができるように整えられています。その中で、今日祝う三位一体主日だけは、聖書に直接書かれたことではなく、教会の伝統の中で神をどのように表現するか？という営みの中で生まれた三位一体という教えについて覚える日になっています。少し異質な日曜と言っても良いかもしれません。

私たちは、「父と子と聖霊のみ名によって」と言いながら、十字を切ります。また、祝祷では「主イエスキリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、私たちと共にありますように。」と祈ります。今日の福音書にあったように、私たちは「父と子と聖霊のみ名によって」洗礼を授けられます。父と子と聖霊という三位一体の神を信じることは、キリスト教における中心的な教えの一つとされています。

では、唯一の神に父と子と聖霊という3つの名前があるのはなぜでしょうか？父、子、聖霊は3つの別の神なのではないのでしょうか？

三位一体という説明をする時に、唯一の神は父と子と聖霊という3つの位格を有すると言うことがあります。位格というのはペルソナというラテン語を訳したのですが、もともとは演劇をする人がつける仮面を意味する言葉です。演劇をする俳優が、自分の演じる役割を明示するために、仮面をつけて顔を変えるように、神はあるときは父という仮面をつけ、あるときは子という仮面をつけ、あるときは聖霊という仮面をつけるのだと表現したわけです。

人間でも、一人の人がさまざまな顔（仮面）を持っているものです。例えば、職場では主任、家に帰れば母であり妻、地域では子ども会のお世話役、実家の親から見れば娘で、、、などなど、ところが変われば別の顔を見せるものです。同じように、私たちの神は、3つの姿でこの世界に関わりを持つ方なのだと表現するのが、三位一体の教えだと理解するとよいでしょう。

また、父と子と聖霊を3つの神の働きと見るといいと思います。父なる神は、この世界を創られた方であり、この世界の源です。しかし、私たちは父なる神を見ることができません。子なる神は、この世界を愛される神が、この世界に現実に現れ関わりを持たれるということを示す方です。十字架の苦しみやその生涯を通して、神が共に苦しみ、共に喜ぶ方だということを私たちにはっきりと示されました。聖霊なる神は、神の息、活ける命の水、炎、風などと表現されます。私たちは、聖霊によって神との交わりを与えられます。

そして、この3つの顔（位格）、役割を持つ神の働きは、常に一つのものであるということを、三位一体の「一体」という言葉から受け取ってほしいと思います。イエスが西に行こうとしているのに、父なる神は東に行けと言い、聖霊の風は北から吹いてくる。などということはないのです。

父と子と聖霊、3つの姿を神が示すというのは、あらゆる形で神が私たちに愛を示しているということを表現しています。父と子と聖霊が一体であるように、私たちの教会も一つとなって、神の愛を知らせるものとなるように祈ります。

「わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」(ヨハネ17:11)というイエスの祈りに応えるものとなれますように。